別府今昔あれこれ話

大野保治

①「市民の目線」で浜田市政の誕生

―来年こそ再浮揚の年に―

◇…平成15年の一年を振りかえって見よう。4月の統一地方選、10月は自民党総裁選、11月には衆院選があり、”選挙の年“でもあった。米英軍のイラク進攻とテロの激化、新型肺炎SARS騒動、自衛隊のイラク派遣、そして年金制度崩壊の兆し、小泉構造改革行き詰まりか、と気の晴れないニュースが続いた中で、別府市はどんな1年だったのか。

（H15・12・28「大分合同新聞」）

初当選が決まり、ガッツポーズの浜田博氏（H15年4月27日）

※　※　※

▼4月の統一地方選前半戦の知事選は、元経済産業省事務次官の広瀬勝貞氏が辛くも初当選。県議選別府市区（定数5）は自民党が「4議席を」と欲張りすぎて、牧野浩朗、荒金信生の両現職が当選したのみ。加藤純子氏（共産党）は再選を果たし、伊藤敏幸（公明党）、佐藤博章（民主党）両氏か初陣を飾った。

▼統一地方選後半戦は、別府市長選で3選をめざした井上信幸氏（自民、公明両党推薦）があえなく落選。「市民の目線で」と訴えた前社民党県議の浜田博氏が当選し、別府市政史上初の革新系市長が誕生した。定数が2つ削減されて31となった別府市議選は、”3人落ち“の少数激戦で、現職は全員安泰だった。

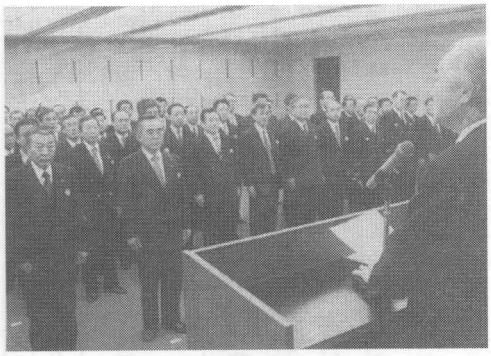
▼5月14日　臨時市議会における議長選は、自民党市民クラブの清成宣明氏が、対抗馬の公明党・原克実氏を抑えて当選したが、その差わずか1票。共産党（3人）が清成支持に回り、開けてビックリ投票箱だった。

▼7月7日　浜田市政初の人事異動発令。市民グループのまちづくりを支援する「まちづくり推進室」が新設された。

▼7月13日　"スポーツ観光"や市民スポーツ推進の核となる市総合体育館（べっぷアリーナ）がオープン。

▼10月7日　経営難から存続が危ぶまれていた老舗の遊園地「別府ケーブルラクテンチ」が岡本製作所（大阪市）に経営譲渡され、別府市役所で浜田市長が立会人となって調印式が行われた。

▼11月9日　衆院選が投開票され、大分3区は旧3区現職の岩屋毅氏（自民党）が旧4区現職の横光克彦氏（社民党）を破って3選を果たした。横光氏は比例代表で復活当選。



浜田市長（右端）のあいさつを聞く市職員（きのう）

▼11月10日　別府市は井上前市政が進めてきた別府競輪の場外車券売り場「サテライト日田」の日田市進出計画を「断念する」と発表。

▼11月28日　国が進める構造改革特別区域で、別府市が「留学生特区」に認定された。公営住宅入居の便宜を図るなど、外国人留学生に対する生活支援が目的。

② 別府市制80周年記念式典 功労のあった133人121団体表彰

―「80歳」さらなる発展を―

別府市制施行80周年記念式典がH16・4・18日、市総合体育館（べっぷアリーナ）で開催され、記念講演や市民参加のイベントなどもあった。

記念式典には約800人が出席。大塚利男助役が開会の言葉を述べた。まず、個人133人と121団体に対する表彰が行われた。内訳は―省略―。浜田博市長がそれぞれの代表に表彰状を手渡した。

また、別府市制が施行された大正13（1924）年4月1日に生まれた櫻井光夫さん（亀川四の湯町）と小畑冨美枝さん（荘園町）に、浜田市長が花束と記念品を贈呈した。

浜田市長は「これまでの歴史に刻まれたあゆみは、幾多の困難を乗り越えて今日の別府の観光都市としての基盤を築き

日本を代表する国際的な観光温泉文化都市の地位を確立する80年にほかありません。これはひとえに、多くの諸先輩の情熱とご努力のたまものであり、衷心より感謝と敬意を表する次第です。『別府に住んでいて良かった』『行って良かった、もう一度行きたい』そのような魅力あるまちを再構築し、さらなる飛躍・発展を遂げるよう、今後とも市民の皆様の一層のご支援、ご協力をお願いします」と式辞。

大分県知事代理の石川公一副知事（元別府市助役）、姉妹都市関係にある熱海市の鈴木七平収入役、清成宣明別府市議会議長が来賓祝辞を述べた。被表彰者を代表して、善行部門の小野小夜子さんが「過分なお言葉をいただき、身の引き締まる思いです。今の感激を深く胸に刻み、微力ですが、市の発展と地域福祉の向上に努力します」と謝辞。全員で別府市歌を合唱し、万歳を三唱して式典を締めくくった。

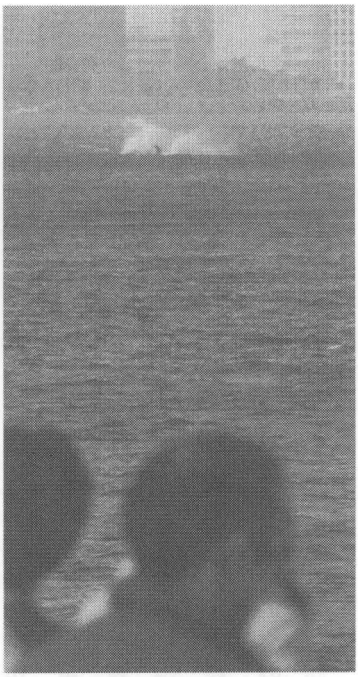
同じ“誕生日”の小畑さん（右）と櫻井さんに浜田市長（左）が花束

地域住民のコミュニティーになっている街の湯。紙屋温泉の前でくつろぐ人たち

③ 別府湾迷子に愛称「かんちゃん」
クジラ熱急上昇
―見物1日3千人　遊覧船ツアーも―

大分県の別府湾にクジラが迷い込んだ平成16年1月22日から、すでに3週間あまり。立ち去る気配のないクジラの人気が高まった。海に面した公園は連日たくさんの見物客でにぎわい、遊覧船による「ホエールウオッチングツアー」も始まった。アゴヒゲアザラシの「タマちゃん」にならい、地名にちなんで「かんちゃん」の愛称までついた。かんちゃん、いつまで別府湾にいてくれるの？

※　※　※



見物人たちの向こうで、大きな水しぶきがあがった

「シッポが見えた」

「すごい、跳んだ」

2月14日午後、大分市の田ノ浦公園の数百㍍沖で、体長10㍍前後のクジラが何度も海面に跳躍した。宙を舞う度、約100人の見物客からは大歓声。北九州市から来た会社員の望月美佳さん（33）は「こんなに跳ぶとは思わなかった」と興奮気味だった。

この公園の見物客は1月末から徐々に増え、祝日だった今月2月11日の人出は約3千人を数えた。14日も夕方までに約2千人が訪れた。

クジラが別府湾で初めて目撃されたのは1月22日ごろ。日本鯨類研究所（東京）が写真を分析した結果、ザトウクジラと分かった。田ノ浦公園近くで4月に新装オープンする水族館「うみたまご」の熊代徹さん（35）は「ザトウクジラは冬場、暖かい南に移動する。このクジラは2、3歳の子ども。移動の途中で湾に迷い込み、餌のエビ類などが豊富なので居着いたのではないか」とみている。

「かんちゃん」の名称は、大分港そばの地名「かんたん」（大分市生石）にちなんだものだ。この場所にある商業施設「かんたんサーカス」は、ホームページで別府湾のライブ映

像を24時間流している。

別府湾遊覧サービスは11日から遊覧船ツアーを始めた。別府国際観光港を出発し、沖合を約1時間半かけて回る。社長の曽我幸治さん（58）は「38年間別府湾を見守ってきたが、クジラは初めて。間近で見るとすごい迫力」と話している。

（平成16年2月15日号「朝日新聞」）

別府湾を見渡せる田ノ浦公園には、双眼鏡やカメラを手に大勢の人が集まった＝いずれも14日、大分市神崎で
（「朝日新聞」大分版より）

④ 七十代女性が六五〇〇万円を寄付

―泉都によみがえれ旧浜田温泉―

別府市は四月二十七日、旧浜田温泉（別府市亀川浜田町）を元の場所で復元する費用に充ててほしいと、六千五百万円を市内の七十代の女性が市に寄付したことを明らかにした。

浜田博市長は「寄付をしてくれた人の思いを実現するため、六月の市議会に向けて鋭意検討したい」とのコメントを出し、復元へ向けて動き始める。旧浜田温泉の修復・保存を訴えてきたグループの人たちは「世の中捨てたもんじゃない」と喜んでいる。

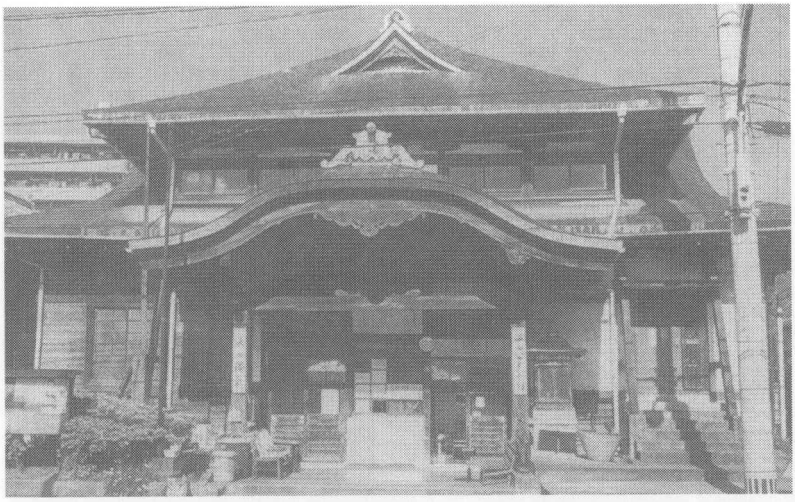
※　※　※

市長「復元」を検討

市長公室によると、女性は旧浜田温泉の復元を強く願い、今月中旬から寄付の額などについて話を煮詰めてきた。先日、寄付を受けた際、市長は直接、女性に感謝した。市は「浜田温泉館」として、旧浜田温泉を復元する意向だが、施設の内容は決まっていない。

市は二〇〇一年、老朽化した建物を取り壊し、外観を似せ

て建て替える方針を打ち出した。文化的建造物の大切さを訴え、存続を求める市民が署名活動などを展開したが、市は昨年十月に取り壊すことを決め、ことし三月までに解体。敷地は更地になっている。



取り壊し前の旧浜田温泉

解体に際し、市は建物の設計図を作り、ほとんどの部材を保管している。新しい材木を使った場合の復元費用を概算で六千五百万円とみていた。

亀川地区の町おこしグループ「別府八湯亀川温泉・亀カメ倶楽部」の高橋東洋雄代表世話人は「復元されるまで時間がかかると思っていたので寄付してくれた人に本当に感謝したい」と歓迎。亀川浜田町自治会の河野博司会長は「復元されれば地域の活性化につながるかもしれない。（旧浜田温泉跡地に地元が設けるよう要望している）駐車場だけは必ずつくってもらいたい」と話した。

旧浜田温泉の修復・保存に向けて二万人を超える署名を集めた「浜田温泉館を温泉文化遺産として使って守る会」の高橋鴿子（はとこ）代表は「施設の中身は地元や専門家、まちづくりグループの声を聞きながら決めてほしい」と期待を述べた。

まちづくりグループからは温泉施設としての利用を求める声もあるが、二〇〇二年に新しい浜田温泉が、市道を挟んで向かいに完成していることなどを挙げ、否定的。市は「湯の供給が困難であり、県公衆浴場施行条例で温泉施設間の距離は最低でも三百㍍必要」と説明する。保管している部材についても「現実的には使えそうにない部材も多い。使える部材がどれほどあるか、早急に調査する」（建築住宅課）など、復元へ向けたハードルも残っている。

（平成16年4月28日付「大分合同新聞」）

⑤ 市職員が手造りの「足湯」

―市上人ヶ浜の市営砂湯に―

別府市上人ヶ浜の市営海浜砂場の空き地に、市温泉課の職員が造った足湯が完成。十七日、現地でお披露目会があった。既に十三日から無料で開放しているが、お盆の三日間で五百人以上の観光客が利用。泉都の新たな観光スポットとして人気を呼んでいる。

※　※　※

足湯は緩やかなカーブ状で、長さ五㍍、幅七十㌢、深さ二十五㌢から三十㌢。海岸の景観に配慮して別府産の自然石を積み重ね、コンクリートで固めた。木製の長いすを設置し、一度に八人程度が座れ、温泉を楽しみながら別府湾を一望できる。

この日は浜田博市長ら市三役が「足湯」を体験。海浜砂場に来ていた子どもたちと一緒に温泉に足を浸した。小雨の降るあいにくの天気だったが、浜田市長らは「温度は適温で、景色もよくて気分がいい。ずっと入っていたい」と満足した様子。造った温泉課の大野親司主査補ら四人をねぎらった。

上人ケ浜の市営海浜砂場の空き地

【写真上】足湯を造った４人の市職員
【写真右】完成した足湯に入る浜田市長（右列中央）や子どもたち
（「大分合同新聞社）

足湯は近年、全国的に人気があり、市内でもホテルや観光施設に設けられている。市も市営の足湯の設置を検討。海岸の近くに泉源と水源がある同所を選んだ。

建設の経費を抑えるため、大野主査補ら四人が仕事の合間を縫って二カ月がかりで完成させた。大野主査補は「足湯の形状をカーブ状にしたり、石を敷き詰めるなど苦労しましたが、満足のいく仕上がりです」とにっこり。

近くには海浜砂場のほかにも上人ケ浜公園や市美術館があり、気軽に温泉気分を味わえる最適のスポットとなりそう。

（平成16年8月19日「大分合同新聞」）

⑥ 竹瓦温泉砂湯がリニューアル 汗かいて気持ち良い

―男女共用と浴衣着用に変更―

改修工事中だった別府市営竹瓦温泉の砂湯が10月1日、リニューアルオープンした。男女別に仕切られ裸で砂に入る入浴法を変え、男女共用にして浴衣を着用することにした。

また衛生面の改善を図るため、砂湯に湯を張って砂を洗浄するとともに温めるという仕組みに変えた。このため、2面

改修工事が終わり1日再開した市営竹瓦温泉の砂湯

の砂湯を片面を利用している時には、片面は湯を張って休ませるやり方。初日は、約2時間おきに交互に利用した。

7月21日から工事に入り、約2カ月半ぶりの再開。昨年から週2回程度利用しているという常連の鳴海正雄さん（88）＝杵築市＝は「約20分入る。汗をかくのが健康にいい」。入浴システムが変わり、浴衣を着用することになったが「別に抵抗はありません」と話していた。なお浴衣とそのクリーニング代がかかるため、料金はこれまでの780円から1000円に値上げされた。

⑦ 別府の夏祭りリニューアル「夏の宵まつり」スタート

―竹ぼんぼり点燈、音頭大会など、など―

復古調を基調にした新しい別府の夏祭り、温泉遊園地別府八湯祭・夏の宵まつりが7月23日夜、竹瓦小路の竹ぼんぼり点灯式で開幕した。

式では浜田博市長が「今年の夏祭りは期待してください。名称を変更し、レトロとリバイバルをテーマにし、各地でさまざまな催しが行われます。市民のみなさんが参加して楽しみ、観光客のみなさんが来てよかったなあという夏祭りになることを期待します」とあいさつ。千寿健夫別府まつり協会長（別府市観光協会長）、西田友行別府八湯夏のプロモーション実行委員長（別府市旅館ホテル組合連合会長）とともに点灯ボタンを押した。

このあとベテラン流しのはっちゃん・ぶんちゃんの先導で、竹ぼんぼりが懐かしいムードを醸し出す竹瓦温泉横丁を歩き初めし、浜田市長らは「なかなかいい雰囲気だ」とすっかりご満悦の表情だった。

大小の竹ぼんぼりがともされた竹瓦温泉横丁で、流しコンビや浜田市長ら（今日新聞）

竹ぼんぼりは直径30センチから80センチまで大小4種類のほかに、四角いものもあり約220個。ほかに金魚飾りの明かりもある。コスモピア向かい側の駅前通りから竹瓦温泉までの竹瓦温泉横丁と、温泉前から流川通りまでの古いアーケード竹瓦小路に飾られており、まつり終了の8月29日まで40日間、毎晩7時から12時まで点灯される。

きょう24日は午後7時から9時まで、約30団体1600人が踊りの輪を作る納涼音頭大会がSPAビーチである。国際色豊かなアジアン屋台も登場する（30、31日も）。30日は午後8時半から20分間懐かしい童謡にシンクロした夏宵浪漫花火が、また31日は午後8時から8時45分まで納涼花火大会が、いずれもSPAビーチである。「スパビーチカフェ」（24日―8月1日、午後2時―10時）もお目見えする。28日から30日までは午後7時から9時まで、13年ぶり復活のワイワイ市が駅前通りを会場に開かれる。

（平成16年7月24日付「今日新聞」）

⑧ 国の重要文化財に登録 竹瓦温泉と元冨士屋旅館など

別府市元町にある竹瓦温泉（別府市所有）が国の登録有形文化財に新規登録された。

3月19日、国の文化財保護審議会の答申で認められた。別府市内では、野口病院管理棟（野口中町）、京都大学大学院理学研究科地球熱学研究施設（野口原）、朝見浄水場集合井室（朝見2丁目）、別府市児童館（末広町）、聴潮閣主屋（青山町）、富士屋旅館主屋（鉄輪上）などに次いで15件目、大分県内では101件目。

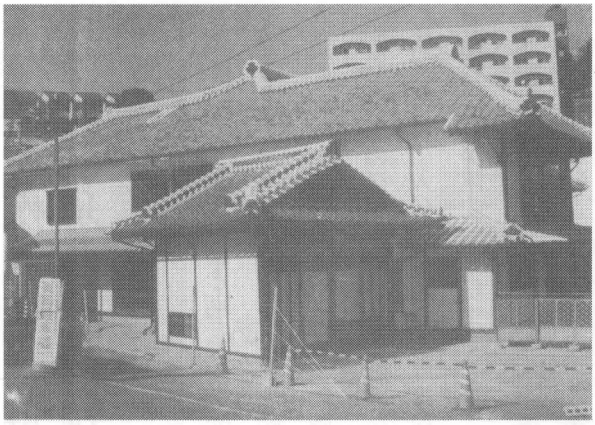
登録有形文化財になった竹瓦温泉

別府市の説明によると、竹瓦温泉は明

治12年に「乾液泉」の名で建設された。

今回、登録された建物は、昭和13年に当時の金額で3万6600円を投じ、別府市技師・村上利作氏の設計により改築された。木造入母屋造りの2階建て。豪華で重厚な唐破風造りの玄関を持つ建物は、別府温泉のシンボル的な存在となっている。

浜田博市長は「別府市内の国登録有形文化財は今回の竹瓦温泉で15件目になるが、このたびの別府市初の温泉建築物の登録を一つの契機として、市内に多く所在する近代化遺産や歴史ある温泉遺産の保護に、これまで以上に全力をあげ取り組んでまいりたい」などとするコメントを発表した。



美しく再生された元・冨士屋旅館（別府市鉄輪上１組）

別府市鉄輪上1組の元・冨士屋旅館＝国登録有形文化財＝はおととしの春から再生工事を行っていたが、ほぼ完成して美しい建物の姿が現れてきた。

オープンは今のところ4月上旬の予定で、約１００人収容できる広間をコンサート会場や貸ホールにする。庭の整備がまだこれからで急ピッチで間に合わせるという。

冨士屋旅館は１８９８年（明治31年）に建築された当時の姿を残す木造2階建てで、96年（平成8年）まで旅館として営業していた。

別府市内でも屈指の老舗旅館で、01年（平成13年）に国の登録有形文化財となった。時代を経た木造建築の趣き、温泉の町の歴史や文化を語る空間を何とか残そうと再生工事が進められていた。おととし5月本格的な解体工事を前に一般公開が行われた時には、約３００人の見学者が訪れ、風格ある建物にため息をもらしていた。

（平成16年3月22日付「今日新聞」）

⑨ 皮膚疾患への効果は？ 温泉泥の共同研究始まる

美容エステで使われる別府八湯温泉泥（呼称＝ファンゴティカ）の医学的効果を探る本年度の産・学・官の共同研究が別府市で始まった。にきびなどの皮膚疾患に効果があるかどうかが焦点になる。

研究には、大分大学医学部皮膚科の藤原作平教授、片桐一元助教授らが協力。二日まで、計二十六人の女性モニターを対象にファンゴティカの顔パックを行い、使用前後の皮膚の乾燥具合、皮脂量、粘弾性などをデータ収集した。

片桐助教授は「人によっては、皮膚の赤みが取れたような印象を受けた。具体的な解析をどうするかは、大学側の意向もあるので、データを持ち帰って検討したい」と話した。共同研究は、二〇〇三年度から実施されている文部科学省の「県央エリア産学官連携促進事業」の一環。別府ＯＮＳＥＮ資源研究開発国際協同組合（産）、大分大学医学部（学）県産業科学技術センター（官）などが参加している。

同協同組合の甲斐賢一理事長は「〇三年度の研究で、ファンゴティカには、皮膚の〝張り〟や、癒やしを与えることが実証されている。医学的な効果が得られれば、一歩進んで、新たな産業興しの可能性が広がる」と期待している。

（平成16年10月5日「大分合同新聞」）

ファンゴティカの皮膚疾患への作用を探る

⑩ 別府町待望の市制施行（大正十三年）

―大別府温泉建設構想―

別府町が待望の市制を施行するのは、大正十三年四月一日である。その前年には、郡制が廃止されている。

別府町議会では二四名全員一致で、町村制第四三条による別府市制実施に関する上申書を内務大臣（後藤新平）に提出していたところ、それが認可されたのである。こうして、戸数七四〇四、人口三万六二七六人の「別府市」が晴れて誕生した。大分市に遅れること一三年、それだけに町民の喜びは大きかった。

新聞はその慶祝行事を賑々しく伝えている（『大分新聞』大正十三年四月二日号）。

当日午前九時、麗らかに晴れた泉都の空に轟然一発、また一発と煙火が炸裂した。同時に町役場では、一八年の歳月に墨痕も薄れた「速見郡別府町役場」の看板が木の香も新しい「別府市役所」の五文字に掛け替えられた、と。

また、紙面には「市になった温泉王国、見よ！この膨張力」との活字が躍っている。第一次大戦の好況で中間所得層が増え、整地の終わったばかりの街区に建てられた新築家屋数は大正十年度五五一棟、十一年度六五九棟、十二年度には六三三棟と瞠目するばかりで市街化現象が急速に進展した。躍進する別府市の「資産概況」についても市財務当局は、有価証券六一〇〇円、現金一三万六六九四円、土地九六七町三反九畝一八歩（最少見積価格二三七万三六三一円）、建物五〇一八坪（同八〇万八一五〇円）、合計三三二万四五七五円、その他地下に滾々と悠久に尽きない無限の宝庫「温泉」を抱えている、と誇らしげにこれらの数字を公開している。

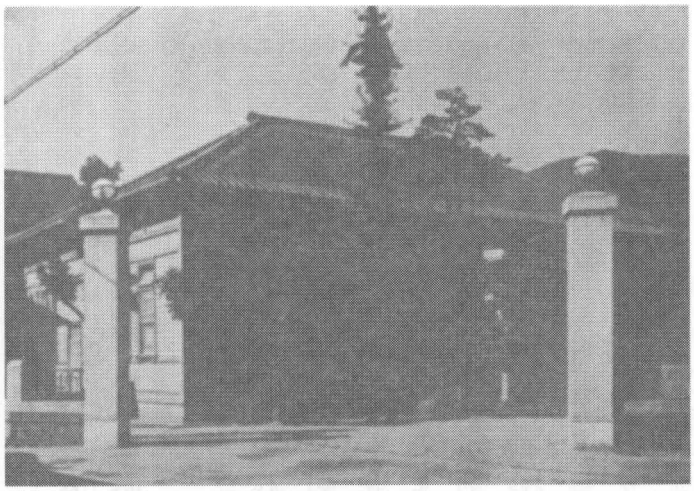
◇　◇　◇

整然とした別府市街
（『別府市誌』昭和８年版による）

奉祝の市民行事も、四月十五日から三日間盛大に挙行された。初日の十五日午前九時、朝見八幡社頭での市制施行報告祭では祝詞奏上・奉告文奉読・玉串奉奠の神事が厳粛に取り行なわれた。当時は祭政一致の時代で、

政教未分離も当然視されていた。また正午から別府公園で、官民合同一二〇〇名参集して大祝賀会が開催された。

三日間にわたる市民の祝賀行事は「熱狂乱舞、空前の大盛況」を呈して「仁輪加（にわか）、旗行列、提灯行列（ちょうちん）」が街を埋め、また「祝賀の飛行機数台、福引券を撒布（さんぷ）しながら旋回また旋回」と一大イベントが展開されて市民は祝酒に酔いしれた、と新聞は伝えている。



別府市役所（『別府写真帖』による）

市制執行直後の六月二十日、別府市会議員選挙が行なわれた。大正十年の法改正により市会議員制度は二級制となり、別府市議会でも一級・二級各一五名（合計三〇名）が選ばれた。続いて九月二十六日、大木俊輔市長職務管掌（大分県理事官）に代わって、初代市長に神沢又市郎が任命された（昭和三年五月二十八日退職）。

また、このころから、有識者の間で近郊温泉地帯の三町村（石垣村・朝日村・亀川町）を合併する大別府政策の推進が叫ばれるようになる。それは、旧市街地を広域化し、地獄回遊道路を整備し、これに電車を走らせ、また戸別に温泉の出る文化住宅地を造成して森林公園を配置するなど、一大温泉保養地帯を建設しようと夢みる「大別府温泉建設構想」であった。市民の理解と協力を得て、周辺三町村の合併が実現を見るのは昭和十年九月四日のことである。

（昭和六十二年三月発刊『大分県史（近代篇Ⅲ）』第一章五節「別府市の成立」大野保治執筆）

⑪ 一遍聖人「別府に上陸」は本当でしょうか

別府市の「上人ケ浜」は昔、「聖人ケ鼻、尚人ケ鼻、上人ケ鼻」といわれていたようですが、鎌倉時代に鉄輪の地獄地帯を開発したとされる一遍上人が別府に上陸したのは、事実でしょうか。

別府市馬場町　一市民

※　※　※

資料は処分か

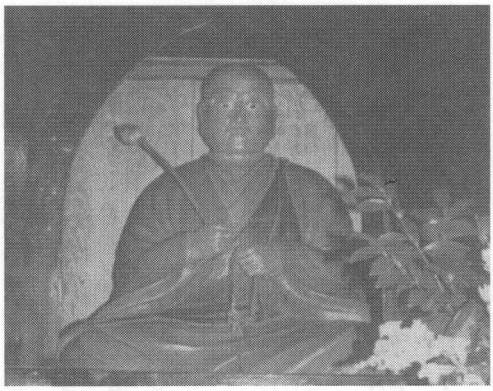
別府八湯の一つ、鉄輪温泉。言い伝えでは、歴史は古く鎌倉時代にさかのぼる。時宗の開祖・一遍上人が一二七六年、念仏行脚の途中に鉄輪を訪れ、噴気立ち上る地獄地帯に経を一字ずつ書いた石を投げ入れて鎮め、湯治場を開いたのが始まりとされている。

では、事実はどうか。湯煙に包まれた温泉街の中心に位置する温泉山永福寺を訪ねた。同寺は江戸時代末までは松寿寺と称し、豊後国主・大友頼泰が建立、寄進した一遍ゆかりの寺と伝えられている。

「残念ながら一遍に関する昔の資料はほとんど残っていません。亡くなる前に所持物の大半を焼いたと言われています」と河野憲勝住職。明治維新後の一八七二年、松寿寺は廃寺となった。寺号を改めて再建されたのが現在の寺院。「本堂を取り壊す際、ひょっとすると残存していた資料も一緒に処分されたのかもしれません」。

「聖絵」に記述

一遍は諸国遊行の旅で二度ほど九州を訪ねているが、故郷の伊予から九州に渡った上陸地点については仏教関係書でも直接触れていない。



永福寺に安置されている一遍上人像

しかし、一遍の死後、弟子の聖戒（しょうかい）が一遍の生涯を絵と文でつづった「一遍聖絵（ひじりえ）」（全十二巻）の第四巻に二度目の九州を遊行した際、豊後国に立ち寄った記述がある。

「すでに九州をまは

りて四国へわたり給はむとし給えるに、大友兵庫頭頼泰帰依したてまつりて、衣などたてまつりけり」

一遍上人に詳しい別府大学講師の小泊立矢さんは「聖絵の記述から判断すると、九州遊行で太宰府を最初に訪ねた後、大隅、日向を通って豊後国に来たのは間違いない」と説明する。聖絵にも鉄輪や松寿寺のことは全く触れられておらず、「言い伝えや永福寺が現存していることから、一遍が鉄輪に来た可能性は高いが、今のところ確固たる資料が残っていないので真実は分からない。」

街の活性化に

では、「上人ケ浜」の呼び名はどうか。別府市誌には「北石垣の海岸線に広がる上人ケ浜公園の北側一帯を指しており、古くは聖人ケ鼻と称されていた」とある。実際に古地図を調べてみると、一九二五年発行の日本交通分県地図（大阪毎日新聞）には「聖人ケ鼻」と表記されている。「聖人ケ鼻から上人ケ浜と転化していったと思われるが、その時期ついて詳細は分からない」（市教委）。

現在、地元では一遍上人をしのび毎年秋、永福寺に安置されている上人像を湯あみさせる「湯あみ祭り」が行われている。「一遍上人探求会」のように一遍とのかかわりを街の活性化につなげようとする市民グループの取り組みも始まった。温泉の魅力は何といっても「心と体の癒やし」。湯煙たなびく景観に一偏上人を思いながら、ゆったりと湯につかって心を癒やすのも一興だろう。

（平成15年12月13日付「大分合同新聞」）

⑫ 温泉の「地熱開発」に先鞭をつけた高橋廉一の功績

別府温泉での「地熱開発」に先鞭をつけた高橋廉一の功績も、特筆に値しよう。新聞は「湯煙かほる鶴見山麓に温泉地熱の利用を説く老研究家」と題して、その訪問記を特集している（『大分新聞』大正14年11月19日号）。

彼の実父は日田県時代の属僚で農民一揆で殉職し、当時八歳の廉一は、松方知事に引き取られ外国語学校を卒業した。のちイタリアでの地熱発電の成功を調べて帰郷し、大正六年から本坊主地獄（当時、朝日村小倉）近くに噴気孔を約八〇尺（二四㍍）掘り、四インチの鉄管から摂氏一一〇度の熱源

を得て実験に成功した。しかし、全財産を投じたうえ負債約六万円を残す破目となり、世間からは「山師だ」「誇大妄想狂だ」と罵倒と嘲笑を浴びながらも「（大正）十四年には待望の地熱発電の電灯が点いた」。その結果は、東京電力会社や技術関係者から注目された。彼はその後、阿蘇火山地帯での地熱試掘にも貢献している。

大正十四年十月、国際連盟主催の万国保健会議が東京で開かれ、一行十数名が国内の主要温泉地での医療機関視察に来別した。

亀の井ホテルでの歓迎会の席上、モスクワ医科大学教授ラデーン博士は「別府の温泉利用は自慢に当たらぬ、もっと大きく活用すべきだ」と、現在叫ばれている温泉の多目的利用を提唱し、特に工業面での科学的利用を強調した。市関係者から無名の研究家高橋の苦労談を聴くや「意を強くし」「事業の発展を祈る」旨の激励があった、と新聞は伝えている。

◇　◇　◇

温泉都市別府の経済的浮沈が国内の観光景気に大きく影響されることは、今も昔も変りはない。日本の資本主義経済は、関東大震災以後も慢性的不況から脱却できず、昭和の大恐慌がじわじわと泉都を襲った。

市制を敷いたばかりの別府市では、昭和に入って不況克服のため中外産業博覧会を開催し、また競馬場・ケーブルカー（民営）の娯楽施設を設けるなど、市勢浮揚に尽力した。しかし納税成績はいっこうに振わず、県税・市付加税合わせて一二万円のうち約四割が滞納の状況にあったため、県に鉱泉税や家屋税を認可するよう陳情しなければならなかった。苦肉の策として市街を終夜点灯で「不夜城」とし、新しく設けた電灯敷設税を徴収するなど、「一石二鳥の秘策」も実施している。

（昭和六十二年三月発行『大分県史近代篇Ⅲ』第一章五節「別府市の成立」より）

⑬ 別府の街は何とかならぬか（大正期）

第一次大戦の終了前後はいわゆる「大正デモクラシー」の高揚期で、また戦争の好況から世は太平を謳歌し、庶民も私生活を享楽していた。大正八年二月、国民は自由の波にかぶれて軽佻浮薄、退廃的な風潮に毒されて「万引」が多いと警

鐘を打ち鳴らしたのは、治安と世相の監視役、警視庁である。

このような浅薄な社会風潮が青少年の健全な精神を腐敗させているとして、その鋭鋒が教育界にも向けられた。新聞は、「醜怪言語に絶せる各校頽廃の状、犯されざるは女子師範のみ」と、この問題をセンセーショナルに取り上げ、女学生は中学生をあさって交遊をもとめ、「西から東から、集る媾曳の群れ」る別府の街は何とかならぬか、と連日キャンペーンを張っている（『大分新聞』大正八年二月）。

こうした世相を矯正するため、文部省でも「腿を出して走る若い女の様は何分にも見苦しい」と、女学校での体操競技を自粛するよう、通牒を発した。労働界の影響を受けて学校ストライキも少なくはなく、佐伯中学校の事例では、五年生二名が「女学生に付文、遊里に足を踏み入れた」とする諭旨退学処分に端を発して全校生徒が同盟休校し、これに父兄会・卒業生が同調して収束困難となった。

このような全国的な社会風潮に対し、ついに政府は大正十二年十一月「国民精神作興ニ関スル大詔」を発するが、これに応えて各学校でも、国民精神の涵養のと社会秩序の尊重とを説いて、「上からの思想善導」を鼓吹したのであった。

⑬「犬ノ飼主ハ繋留スベシ」違背者は五円以下の科料

明治の後半から大正にかけて、全国的に犬を飼う者が増え、県下でも大正四、五年ごろから狂犬病が流行する。市町村では、確たる治療方法もないことから、専ら野犬の駆除に大わらわであった。

明治初期、政府の方策は無主犬・野犬は駆殺するか（明治五・九年「無主ノ犬駆殺ノ達シ」）、さもければ「村長戸長副ノ免許状ヲ受ケ、主人ノ住所姓名等ヲ記シ、又ハ附置クベシ」と命じていた。明治三十年、医師で狂犬病を診断し、または咬傷の患者を治療したときは速やかに町村長が最寄りの駐在巡査に届け出るように達せられていた。続いて四十二年、「近時狂犬病流行シ、危険ノ虞アルヲ以テ左記区内（注、日田郡一円）ノ飼犬ハ其飼主ニ於イテ厳重ニ繋留スベシ。但シ、口網ヲ施シ、綱ヲ付シタルモノハ之ヲ牽キ行クコトヲ得」ると達し、違背者は五円以下の科料に処するとした。

のち大正十五年には、県下の二市二郡（大分・別府両市、速見郡・北海部郡）で犬を係留すべしという飼犬取締規則

（県令第二七号）が公布された。さいわい、この狂犬病は赤痢・チフス等直接人間から感染するもの（法定伝染病）ではなく、したがって国家による隔離・消毒の必要もなく、被害を届けさえすればよかった（届出伝染病）。昭和初期、県下各警察署では「野犬の掃蕩」を徹底するとともに飼主は必ず証票をつけること、また不用犬は県で買い上げる（成犬一頭につき五〇銭、幼犬二五銭）等の措置を講じた。一方、予防注射の普及もあって以後、狂犬病はしだいに減少をみるに至った。

（⑫⑬『大分県史』近代篇三第三章＝大野執筆「犯罪と衛生行政」）

⑭ 明治初期、県は殖産興業の一環に「温泉」を

明治国家創建期、大分県の勧業殖産施策の1つに「温泉」の利用が取り上げられていた。温泉利用が地域住民の利用から湯治客中心に、さらに温泉町（市）へと躍進する基本施策である。

大分県庁に財政を担当する租税課が置かれ、その中の勧業掛（係）が勧業施策を担当することになったのは、明治5年（1872）3月のことである。多くの農民から税金を徴収し県財政をうるおすためには諸産業を興し（殖産興業）、そのためには原初的な第1次産業たる農業を充実し、とりわけ「特産品」を作ろうというのであった。今年まで永年つづいた平松県政の「1村1品運動」のはしりであった、と考えられなくもないだろう。

先述の勧業掛（のち勧業専務と改称）で取り上げた諸施設は当初「養蚕・製糸・職工」の3窓口であった。同8年からは「栽培・牧畜・製茶・鉱山・会社・県税・温泉」の諸分野に拡げられた。この末尾の「温泉」の項目は、浜脇と別府、それに近郊の別府八湯で入湯宿を営む温泉関係営業者のことを配慮してのことであることは、ここに記するまでもないところである。

この当時、郡下の別府村近郊の各村の「旅龍」と「木賃宿」の軒数も記録されている。

・別府村　21軒　・浜脇村　30軒
・鶴見村（照湯・明礬）10軒　・鉄輪村　34軒
・亀川村　8軒

とあり、年間浴客数は「およそ二万千人」と誌す。

また、同12年度から年度ごとに「大分県統計書」（大分県庁）が出刊（ガリ版刷り）される運びとなり、それには戸数・人口・牛馬数・産物から漁船数・人力車などまで各種の統計数字の資料が残されている。2年後の同14年次からは、県内の案内地図「大分管内地図」も登場し、それには別府と浜脇の2温泉場が大分・日出・杵築の城下町など県下15カ所とともに図指されており、県下で初めてのことではないかと『大分県史（第16巻）』は誌している。

明治17、8年ごろに活版印刷されたとされる佐藤蔵太郎（佐伯藩士、のち作家・郷土史家、晩年に豊州新報と大分新聞の主幹を勤めた。安政2年生、昭和17年没）の手に成る『別府温泉記』には、当時「速見の湯」として共浴施設の名が挙げられている。それには—

・別府温泉 — 竹瓦温泉　楠温泉（別名、高札場の湯）　田ノ湯温泉　不老泉　潮ノ湯（海岸砂湯）　その他
・浜脇温泉 — 東ノ湯　西ノ湯　薬師湯など
・鉄輪 — 渋ノ湯　蒸シ湯（蒸シ風呂）　蓼原湯　浮湯など
・鶴見 — 照湯（小倉）　丘ノ湯（小倉ノ湯）　明礬湯　今井ノ湯（竹の内）　谷ノ湯（北中）
・亀川 — 蕩耶泉　四ノ湯など
・内かまど — 御夢想湯　潮湯（海岸砂湯）など
・野田 — 赤池ノ湯（血の池地帯）　蒸シ湯など
・南立石（堀田） — 東ノ湯　西ノ湯など

明治も20年頃になると「大小ノ客舎（宿屋のこと）は70余戸、貸席を営む者20余戸、年中の浴客は実に3万人にも及べりという。土地の繁昌又想ふべし」（上掲『温泉記』）というまでになった。

⑮ 旅龍屋の料金は？ 芸娼妓の実態

ところで、明治末期（41年現在）の2町合併（39年4月）後の別府町では宿屋数は110軒、その大半が木賃宿か旅館と木賃との兼業であった。やや詳細に記すなら、旅籠専業はわずかに6軒、木賃宿が58軒、残り46軒が木賃兼旅籠であったとされる（同41年刊の加藤十次郎『豊後温泉案内記』）。

この「案内記」によれば、旅籠屋の料金（表）は施設や食事などにより1〜7等級に分けられており、1等（3食賄付き）3円、以下50銭あて下り、最も安価な7等が50銭であっ

た。一方、木賃宿の等級は甲・乙・丙・丁の4段階に分けられており、部屋代の外に貸蒲団は2銭5厘以上10銭以下、蚊帳は3銭以上15銭以下、呉座（夏分に使用する）など必要な品は必要なだけ借り受け、自炊するというのが建前であった。

つづいて貸席と芸娼妓の取締規則を見てみよう。この営業は、宿屋たる旅龍よりも早期であり、取締の初見は明治11年（1878）のことである。

もともと「貸座敷規則」と「芸娼妓規則」とは別個であった。両規則が1本化されたのは同18年の「貸座敷芸娼妓規則」がこれである。これらの規則で、県下での営業免許地は下記の5カ所が指定されていた。

・速見郡別府港（別府村）　・同浜脇市街（浜脇村）
・海部郡関港（佐賀関村）　・同郡下ノ江港（下江村）
・大分郡大分港（大分町）

ここで、これらの営業許可の条件を述べると、貸座敷に必要な鑑札料は業者が50銭、芸娼妓は5銭、賦金（営業税）として1ケ月1人につき2円、芸娼妓の芸妓は1円50銭、娼妓は50銭であった。なお、娼妓の営業許可年齢は15歳以上、芸妓は客をとることは禁止され、営業時間も日の出から午後12時までとなっていた。娼妓はまた月3回の黴毒検査を受けることが義務づけられていた。

参考までに解説を加えるなら—木賃宿の「木賃」とは木銭で、すなわち薪代のこと。徳川期までは、およそ旅人は米を携帯し、薪代を支払って旅籠に泊まっていたとされる。食糧（主に米）を持参して燃料費（木賃）を支払って木賃泊りすることから、この用語が常用化したといわれる。明治期に入って安価で泊まれる安宿をいうようになったが、第二次大戦後の食糧難（1日の配給米は大人1人当り1合2勺）時代、修学旅行や甲子園野球の選手たちは靴下に米を詰めて宿舎に持参したという経験者も会員の中にはいるのではないか、と思う。

なお、加筆するなら、明治20年度の芸娼妓の数は、芸妓が186人、娼妓は116人、合計302人（但し、全県）。これが明治末年（45年）には同じく芸妓560人、娼妓270人、合計830人となっている。これが大正期になると、第1次世界大戦の好景気でさらに増大をみる。その後、第二次大戦勃発までつづくのである。

（⑭⑮『別府史談』創刊号、第二号、第三号、第四号、第五号など「別府の行政事情」参照）